

ノッド・トゥ・ボブ

A Nod to Bob



By
Scott Creasey



「A NOD TO BOB」

ノッド・トゥ・ボブ

THE 4TH DIMENSION REVISITED AGAIN

BY SCOTT CREASEY

<日本語解説書> 翻訳:平賀義達

(訳注：表題の「BOB」とは、アメリカのメンタリスト、BOB CASSIDY (1949~2017) のことです。彼は、優れたメンタリズムの演技者に与えられるダニンジャー賞を受賞した、素晴らしいメンタリストでした。メンタリズムに関する著作もあり、特に「THE ART OF MENTALISM」VOL.1~2は有名です。タイトルの「A NOD TO BOB」は、「BOB CASSIDYに賛成！」といった意味です。

この本で取り上げている「4DT」(THE FOURTH DIMENSIONAL TELEPATHY)は、かのTHEODORE ANNEMANNが20代半ばにして考案した傑作で、3枚の封筒に入れた3枚の紙片に書かれた客の情報を読み取ってしまうエフェクトですが、その後多くのバリエーションが発表されました。中でもBOB CASSIDYのやり方が有名で、著者もそれに魅せられて「4DT」の研究を始めました。ANNEMANNの原案は、封筒に1, 2, 3と番号をふるのですが、密かに1つずつずらして番号を書いて封筒の順序を変えて、いわゆる「ONE AHEAD」原理を使うものでした。本書ではそれをしないで済むような工夫をしています。参考にさせていただきます)

「私は、メンタルタッチのトリックを行う疑似メンタリストなのか、それともやっていることが本当に起こっているだと思わせるようなメンタリストなのだろうか・・・

私は後者でありたい」

BOB CASSIDY

はじめに

先に進む前に、言っておきたいことがあります。

私が現在使っている4DTのやり方は、BOBの原案に取って変わるようなものではありません。しかし、その正統的なヴァリエーションだと思っています。

私はこの本を、「A NOD TO BOB、THE FOURTH DIMENSION REVISITED AGAIN」(4DTのさらなる別のやり方)と名付けたのは、ANNEMANNの原案になる「FOURTH DIMENSION TELEPATHY」のBOB CASSIDYのやり方を読んでから、それに魅せられていくつもの私のやり方を考えては演じ、ボツにするという事をやって来たからです。そして、それらの多くを本やレクチャーでも発表して来ました。

「4DT」とそのヴァリエーションは、私が「何かやれ」と言われた時に初めに思いつくトリックであり、実際に6枚の名刺だけを使うクローズアップやキャバレーショーのためのものを用意しており、そのための名刺を何時も財布に入れて持ち歩いています。

しかし、「4DT」の歴史はどこから始まったのでしょうか？

1932年にBURLING “VOLTA” HULLが「WORLD’ S GREATEST MENTAL TEST」を発

刊した時、その中で25歳の青年の投稿に触れています。その青年が THEODORE ANNEMANN でした。

「FORTH DIMENSIONAL TELEPATHY」というタイトルのそのトリックは、封をした封筒のテストをマジックのクラシックの1つにまでしましたが、私はメンタリズムに対する ANNEMANN の最大の貢献の1つだと思っています。

それが当時としては革命的なものであったのは、「ONE-AHEAD」原理に伴う不自然な動きを必要なくしたことでした。現在では、彼のそのやり方は当たり前のように行われていますが、まさに ANNEMANN の天才的な発想でした。

BOB CASSIDY は、そのやり方を「THE BACKWARDS ONE-AHEAD METHOD」（「逆ワンアヘッド原理」）と呼びましたが、それは「ワンアヘッド」原理をうまく隠したやりかたであり、ANNEMANN が25歳であったにもかかわらず、マジックとメンタリズムの世界に広く知れ渡り始めたのです。

今までの「封をした封筒」のルーティンでは、1枚の封筒の内容を密かに知って（通常はフォース）、未知の封筒の中の紙片に書かれたことをミスコールしていました。それから、その封筒を開けて中の紙片を取り出し、間違っていないことを確認するふりをして次の（ワンアヘッドの）情報を得ていました。

ANNEMANN は従来の「ワンアヘッド」原理自体は否定しませんでした。タイミングの問題を重視しました。従来のやり方では、メンタリストが封筒の内容を宣言し客がそれを認めてから、あらためて封筒を開けて紙片を取り出しますが、客が「当たっている」と認めているなら、なぜわざわざ封筒から紙片を取り出して読むのか、という問題があります。客の言ったことを疑っているようで、客に対しても失礼とも言えるかもしれません。

ANNEMANN の解決法はシンプルで、開示を行う前に封筒を開けるのです。つまり、1枚の封筒についてメンタリストはボードなりノートパッドに何かを書き、書いたものを見せずに客に持たせます。それから封筒を開けて中の紙片をミスコールすると同時に「ワンアヘッド」の情報を得ます。客に渡したボードを開けさせると、ミスコールした内容が書かれているのです。

従来のやり方では、3回も同じやり方をしたら、観客の中にやり方に気づく人も何人も出て来るだろうと、ANNEMANN は考えたのです。そこで、上記のように開示のタイミングをずらすことで、使われている方法をうまく隠すと同時に、エフェクトのドラマ性を高めたのです。

そして、BOB CASSIDY が登場します。

彼は40年の時を経て、ANNEMANN のやり方にさらに手を加えました。そのやり方は素晴らしく、今でも多くのマジシャンとメンタリストが使っています。

彼のやり方は「4DT」を革命的に変え、ANNEMANN のアイデアを次のレベルへと押し上げました。彼は、原案で必要であった「フォース」を必要なくしたのです。ここでは、「フラップの無い封筒」による封筒のスイッチなどが行われました。

私は、彼の「MENTAL MIRACLES」VHS ビデオテープ（1997年）にあるその方法を見て以来、そのやり方に憑りつかれて何年もそのまま演じていました。しかし、次第に自分のやり方を考え始め、BOB のやり方にあった封筒の構造や紙片の折り方などを変えていきました。そして、最終的に「ワン

アヘッド」の情報を得るための納得性ある動機付け（正当化）を伴った開示方法に至りました。

以上のことは25年の間に進んできたことですが、最終形はさらに数年かけて仕上がりました。結局、周り回って、最後は封筒と紙片とボードを使うことになりました。ただ私が思うには、（これがベストだというつもりはありませんが）、おそらく私が知る限り、もっともシンプルでクリーン、さらにいろいろと応用が利くやり方だと思っています。

「A NOD TO BOB, THE FORTH DIMENSIONAL TELEPATHY—AGAIN」

によろこそ！

EVOLUTION （進化、発展）

私が経験浅いメンタリストと話した時に、彼が ANNEMANN の「4DT」の BOB CASSIDY による改案について言ったことが印象に残りました。彼は、BOB のやり方の素晴らしい点は、フォースや PRE-SHOW（訳注：ショーが始まる前に行う客への仕掛け）、インプレッションデバイスなどを使わない点よりも、それぞれの開示の後に紙片を客に返している点だと言うのです。

私はこれはとても興味深いことだと思いました。というのは、BOB のもっとも広く行われているヴァージョンでは、紙片を客に返すことはないからです（彼がそう思ったという事は、観客もそのように感じて会場を後にした人が多いという事なのではないでしょうか。そのことの方が素晴らしいと言えます）。

私は BOB に実際にそれは可能かと聞いたことがあります。紙片を返すヴァリエーションも考案したがあまり実用的ではなく実際に使うことはなく、紙片に書かれた情報の上に親指を乗せて大部分を隠したうえで観客にチラリと見せるやりの方が気に入っている、とのことでした。

実際に紙片を客に返す「4DT」のやり方もいくつも発表されていますが、私自身もかつてその「紙片を返す」というアイデアに憑りつかれて、いくつかのやり方を考えたことがあります。しかし、それによってどこかに余計な手順が発生し自然なルーティンの流れを損なうリスクが高いため、結局 BOB と同じく、その考えにこだわることはなくなりました。それは、マジシャンが自分の使う道具をすべてあらためさせなければいけないという考えと同じことだと思いました。私は自分のルーティンを、余分な作業で止めたりせずに、自然体で流して行きたいのです。

ですから、本書のヴァージョンでは原案と同じく客に紙片を返すことはしませんが、「ワンアヘッド」の情報を得るために封筒を開ける前に、ボードにそれを書いて客に渡すので納得性が高いです。

「4DT」のこのヴァージョンに使う道具はまったく普通の封筒に見えて、仕掛けもシンプルで、手順も覚えやすいものです。紙片を折ったり、ポケットに入れたり、スイッチしたり、インプレッションを取ったり、封筒に違う数字を書いたりしません。3枚の名刺と3枚の封筒、ペン（とボードあるいはノートパッド）を使います。

私が昔自分の「4DT」のヴァリエーションを作る時に、最初に考えたのが「封筒に嘘の番号をふる」

のを止めるという事でした。また、紙片を折って封筒に入れるのもやめたいと思いました。封筒に入れるのに、どうしてわざわざ紙片を折りたたむ必要があるのでしょうか？

また、封筒の枚数も原案より減らしたいと思い、3枚だけにしました。

さらに、ポケットに手を入れて折りたたんだ紙片を広げる「UMBRELLA MOVE」も止めたいと思いました。ポケットに何度も手を入れるというのは、メンタリストの態度・行動としてはどうかと思うのと、服装の変遷がそれを許さなくなってきたのです。

1980年代、1990年代の、大きな肩パッドや太いズボンの時代には、私は誰にも気づかれずにポケットの中でミカンをむくことも出来た位ですが、その後私が COSTA DEL SOL のクラブで働く頃にはズボンのファッションスタイルが変わり、細くなったのです。多くのメンタリストがTシャツとジーンズを身に着けるようになり、ポケットライティングなどもやり難くなりました。つまり、客にとがめられることなくポケットの中で作業するのがやりづらくなったのです。

BOB のやり方に何らかの変更を加える度に、私は結局ボードの使用に戻ってくることになりましたし、新しいハンドリングが必要でした。さらに「ワンアヘッド」のための動機付け、正当化も必要でした。

しかし、それらを考えることは私にはつらい作業となりました。というのは、BOB CASSIDY がほとんど研究し尽くして私に残されたものが少なかったからです。

EFFECT（現象）

ここでは観客が見る現象、原案と同じ数字、単語、絵の開示現象を述べます。開示はボードやノートパッドを使って行われますが、いくつかのヴァリエーションを後述します。やり方を読む前に、読者もどうやったら出来るかを考えてみてください。

メンタリストはポケットから3枚の小さな封筒を取り出して観客に示したら、中から名刺を取り出します。名刺はペンとともに3人の客に1枚ずつ渡します。

それぞれの客に、何かの情報を名刺に書いてもらいます。客Aは簡単な絵を、客Bは3桁の数を、客Cは子供の頃のペットの名前を書きます。

書いたら名刺を裏向きにして、それぞれの封筒の中に差し込んで戻します。封筒に封をしたら、観客に示します。

メンタリストは封筒を手を持ったら、3人の異なる客によって書かれた3つの異なる情報が入った3枚の封筒がある、と説明し、誰がどの封筒の情報を書いたかは今は分かっていると伝えます。

メンタリストは顔を横に向けたら封筒をミックスしながら、「こうすると、封筒の見かけは皆同じなので、たとえ最初は何の封筒にどの情報が入っているか分かっているとしても、今や分からなくなってしまいます。もちろんどの封筒が誰のものかも分かりません」などと言います。

メンタリストは顔を横に向けたまま、3枚の封筒の中からランダムに1枚を抜き取り、細かく破いてポケットに入れてしまいます。「これで、残っている封筒にはどの情報が入っているのか、誰の封筒かはまったく分からなくなりました」などと言います。

1人の客に残りの2枚の封筒を渡して、ミックスしながら封筒が不透明であること、封をされていることを確認してもらいます。そして、ランダムに選んだ1枚の封筒をメンタリストに渡してもらいます。

メンタリストは目を閉じたまま渡された封筒を額にあてて、その封筒の情報を書いたと思われる客について性格など語り始めます。その後、メンタリストは目を開けたらその封筒を、3桁の数を書いた客に「あなたの封筒だと思います」と言って渡します。

ボードとペンを取り上げたら、客に心の中で3桁の数を強く思ってもらいます。メンタリストはそれを読み取るかのようにしてボードに何かを書きます。ペンにキャップをしたら、ボードと封筒を交換しますが、ボードの表は見せません。メンタリストは封筒を開けて名刺を取り出し、書かれている3桁の数を読み上げ、確かにその客が書いた数であることを確認します。

客がボードを表向きにすると、書かれた数が客の数と一致しています。

もう1枚の封筒を持っている客に、メンタリストは封筒に手を触れたくないので封筒を両手の間にはさんで持って欲しい、と言います。そして、目を閉じて手を残りの2人の客のほうにかざして、封筒の持ち主の性格などを簡単に述べて見せます。メンタリストは目を開けたら、ペットの名前を書いた客の方に向き、残りの封筒はその客のものだと告げます。そして、ボードを取り上げたら、客に心の中で書いたペットの名前を強く思うように言います。書いたものを見せないようにしてボードを客に渡し、封筒を受け取ります。封筒を開けて、中の名刺に書かれたペットの名前を読み上げ客に確認したら、客にボードを表向きにしてもらおうとペットの名前が書かれており、もちろん2つの名前は一致しています。

最後に残った3人目の客に向きます。

「すでに数とペットの名前は分かったので、あなたが書いたものが何かを知るのはマインドリーダーになる必要はありません。それは簡単な絵ですよ？ただ、名刺は封筒と共に破いてしまいましたので、その絵はいまやあなたの心の中だけにあります」

その客にステージに来てもらい、1枚のボードとペンを客に渡したらその絵をボードに書いてもらいます。同時にメンタリストもボードを取り上げたら、客に背を向けてボードに何かを書き始めます。客が絵を書き進めるのに従って、その「思考波」を感じ取って書いているようなジェスチャーをして見せます。

済んだら、2つのボードを観客に向けると同じ絵が描かれているのです。客は拍手に包まれて客席に戻ります。

SETUP (準備)

やり方が分かりましたか？

—以下省略—